

し。享保三年十月九日御意也。と見え、葛巻昌興自記元祿二年五月十九日の條に、傳太の御太刀、御節操御守護として御部屋に指置かるゝ處、久丸君御守護に金澤へ遣さる由に付、右御太刀と小鍛冶の御脇差と取替へられ、小鍛冶の御長刀は、御豐様、御敬様の御守護に金谷屋敷の御亭に指置かるゝに付、久丸君の御守護に遣さる。代り御道具の事、今日本阿彌光山へ御尋の處、三池可然旨言上す。三池の御道具は、尙三腰御土藏に有之由。末の三池も此作には奇妙有之旨、常に人口にある處也。傳太の御太刀・小鍛冶の御長刀は、本阿彌拭ふ時分、朝精進致し相勤むる由也。如此の類尙有之哉の旨御尋の處、公方家より本阿彌へ代々御預けの鬼丸の太刀、扱又禁裏に壺切と號する御劔、是等拭ふ時分も朝精進仕けり。以上四腰の外は無之旨言上す。とあり。享保三年九月本阿彌十郎右衛門より金澤劔師會根田彌太郎等宛名の書簡に、足利重代之御太刀二つ銘、鬼丸・大傳太、右三振は別而重寶の太刀にて有之。右之内二つ銘は山城國愛宕山に有之。大傳太は御國薪丸に只今有之。鬼丸は豐臣秀吉より本阿彌光徳へ御預け被成。大坂落城之以

後、台徳公へ本阿彌光室より及伺候處、永々本阿彌家に御指置之段被仰渡。右鬼丸は國綱に候。粟田口にて打ちたり。相摸國に暫く在國の時は、眞國とも打ちたり。源氏重代の鬼切・鬼丸と云ふ鬼丸なり。鬼切は童子丸共云ふ。只今松平越後殿に有之。童子丸は安綱なり。鬼切・鬼丸の靈劔は、太平記に委しく有之通に候云々と。此の書簡は熊谷止齋の享保録に載せたり。又舊藩十一世參議中將治脩卿の時、傳太・小鍛冶兩靈劔の事をば穿鑿し給ふに付き、寛政七年六月本阿彌より納戸奉行宛所にて言上書に、大傳太と小鍛冶宗近との品位の儀御尋ねに付き言上す。一休作品位付に定り有之。最上の位と申すは、吉光・正宗・義弘にて、小鍛冶は右三作に引續きたる位也。大傳太は宗近より遙に位劣るといへども、足利家代々相傳の靈劔三振の内にて、天下の重器に付き、作品に不拘尊き品なり。御家小鍛冶の難刀は、松雲公の御時、傳太の通り地上を離れ候仕立に被仰付。其頃先祖本阿彌光甫より言上し、袋も蜀江錦に命ぜられ、一休の仕立傳太同様の御敬ひに成りたり。今般御尋ねの小鍛冶御腰物は、外の名物高代の御道具とも違ひ、御家非類

の御腰物に付、前々より蜀江錦袋入にて別箱入に成し置かるゝに付、格別に心得手入仕來る處、近年是も地上を離れ候仕立に被仰付、全く傳太御太刀・小鍛冶御難刀の通りに命ぜられ、別して尊敬仕るの旨言上す。今按するに、右小鍛冶の腰物と云へるは、葛巻昌興自記に、元祿二年五月十八日、比日堀部養叔、小鍛冶宗近の脇指を獻上す。是は元秀吉公より備前上様へ被進處、備前上様召仕はるゝ朝鮮人左京と云ふ者に下されしを、養叔の弟養佐を左京の養子に約束せしに、件の脇差を授け、今養佐の子養壽家藏たる處、内々多賀信濃に附申之、頃日進獻之。とあり。備前上様とは、宇喜多中納言秀家卿の室家にて、利家卿第四の息女なり。前田家略譜に、於語姫天正二年生。幼而爲豐太閤秀吉公之養女。被嫁備前中納言秀家卿。故世人稱備前上様。生二男一女。慶長五年秀家卿被配流于八丈嶋。依而來于加州金澤。賜化粧田千五百石。寛永十一年五月廿三日卒。年六十一。號樹正院殿。とあり。堀部養叔及び弟養佐は、寛文十一年の士帳に、二百石醫師堀部養叔・百五十石醫師堀部養佐と見え、元祿元年の士帳に、二拾人扶持堀部養碩、拾人

扶持堀部養壽とありて、右小鍛冶の腰物は養壽より進獻せし短刀なる事知られけり。加藤惟寅の蘭山私記に、天下の靈劔七作は、豊後行平・筑後三池・山城・達摩・奥州・寶壽・出羽・月山・薩摩・波平・筑前・金剛兵衛、以上七作必ず化生恐る云々と。

○御花畑

此の地は、薪丸より本丸高石垣下へ往く間なる空地にて、高石垣下の地を呼べり。寶曆火災前の城中の圖を見るに、此の地に長屋四筋あり。寛永四年の士帳に、御傍衆横地善九郎御花畑有之。とあり。此の御花畑も同地なるべし。此の地を御花畑と呼べるは、往古城中本丸の地に本源寺ありし頃の遺稱にて、蓮池・極樂橋等の舊稱に同じと云へり。金城深秘録に云ふ。御花畑は昔一向宗の御堂本丸にありし頃は、本丸を上品上生の臺と名付け、御花畑・蓮池を見おろし、極樂の體粧を表したるもの歟。といへり。平次按するに、山本基庸筆記に、利常卿の時、近藤加左衛門は御露地の御用相勤めたり。或時御花畑へ御出御覽被成ける處、菊に養ひを仕ける休を御覽被成、如何と御尋被成處、加左衛門、